私の医療・介護物語 ⑥1

ふれんどりぃ代表取締役

筒井 すみ子 氏(1)

認知症の母のため 介護事業運営が夢に

「洋服ダンスから服が盗まれているの。誰かが家の中に入っているから警察に行こうと思って」。電話の向こうで興奮して母が訴えてくる。こんな電話が毎日のように神奈川に住む私のところにかかってきた。私が介護事業を始める前、特別養護老人ホームで介護職、知的障害者の作業所で支援員、社会福祉協議会で専門員、病院でソーシャルワーカーと、さまざまな分野の福祉職として働いていたころのことだ。

心配になり茨城の実家に行くと、タンスや玄関に南京錠が3つもかけてある。やっぱりおかしい。母と親しいご近所さんに話を聞きに行くと「ここのところ、同じ話を繰り返しするよ。鍋も焦がしているので、なるべく見にいっている」。おばちゃんは心配そうに教えてくれた。

一日に午前、午後とスーパーに行っては鮭と卵と砂糖を買ってくる。母は弟にお弁当を作るのが日課だったので、そのために必要な材料を買ってきたのだろう。家は買ってきたものであふれていた。「やっぱり認知症だな」。すぐに介護保険を申請しデイサービスに結び付けることにした。

私が小学校1年生のとき、父が胃がんで亡くなった。それ以来、母は私と弟をゴルフ場のキャディをしながら、女手一つで育ててくれた。貧しかったが母の愛情の中で育った。高校の時に母が倒れた時は、母が死んだら、私も死ぬと思ったくらいだった。私が「保育士のとれる福祉の短大に行きたい」と言うと、母は「やりたいことはしなさい」と短大に進学させてくれた。今考えるとお金は大変だったと思う。

私が短大を卒業した時、母は元気で働いていたので、横浜で住み込みが条件の児童養護施設で働くことになった。「自分の好きな道に行きなさい」。母のこの言葉に甘えて好きなように生きていた。

結婚をして2人の子供に恵まれたが福祉の仕事は続けていた。きっと働き者の母の背中を見て育ったことが影響していると思う。

45歳の時、胃がんが見つかり、胃を3分の2切除したのをきっかけに「生きる」ということに真剣に向き合うことになった。母を施設に入れずに、理想の介護を追求したい。自分で介護事業所を立ち上げることが夢になった。がんは転移なく現在に至っているが、病気が私の人生を変えたとも言える。

母は自宅でタバコを吸っていたので認知症が進行すると火災の心配が深刻になった。デイサービスの職員が迎えに行くと部屋中が煙だらけだと言われ、早く母を自分の事業所に引き取れるようにと立ち上げを急いだ。そして、定員7名の小さなデイサービスふれんどりぃは、普通の民家を借りて始まった。

（続く）

（プロフィール）
つつい・すみこ　1958年茨城県生まれ。医療・福祉の現場で働き、2005年に神奈川県座間市にデイサービス「ふれんどりぃ」を開設。現在は、同市内で小規模多機能型居宅介護2カ所、小規模デイサービス3カ所などを運営している。